

台湾への修学旅行が三位に大躍進

本誌編集部

台湾へは六位から三位に

文部科学省は四月八日、高校生の外国への修学旅行や外国からの教育旅行の受け入れなどを調査した平成二十五年の結果を発表した。

この調査は、同省の国際教育課国際理解教育係が昭和六十一年から隔年で調査している「高等学校等における国際交流等の状況について」の統計で、今回で十四回目となる。これまでの外国への修学旅行の行先は約三十カ国・地域で、十五万人から十七万人、八百校から千三百校が実施している。

平成二十五年度は、台湾へは二万八百二十九人・百四十校が訪問し、アメ

リカ（三万五千百六十八人・二百六十校）、シンガポール（二万三千五百七十一人・百六十七校）に次ぐ第三位となった。前回（平成二十三年度）調査では六位（一万二千七百六十二人・七十八校）だったから、参加者数で八千六

十七人、学校数で六十二校と大幅に増えている。大躍進と言ってよい。

四位はマレーシア（二万六百十四人・百三十二校）、五位はオーストラリア（一万九千七百五十五人・百四十九校）だった。

これまで常に上位だった韓国へは一萬二千三十七人・百十二校で、前回の三位（二万八百三十三人・百六十七校）から六位に落ち、ちょうど台湾と

韓国が入れ替わった形となっている。

中国の落ち込みは半端ではない。激減と言ってよい。前回の七位（九千三百十二人・八十四校）から十二位（千六百二十六人・十八校）まで落ち、七千六百人も減らしている。

ちなみに、これまでのベスト5は、

平成十八年度は①オーストラリア、②アメリカ、③韓国、④シンガポール、⑤中国、二十年度は①オーストラリア、②アメリカ、③韓国、④シンガポール、⑤マレーシア、二十三年度は①アメリカ、②オーストラリア、③韓国、④シンガポール、⑤マレーシア、二十五年度は①アメリカ、②シンガポール、③台湾、④マレーシア、⑤オーストラリアの順だった。

台湾だけを見てみると、平成十二年度は①一位、十四年度は①一位、十六年度は①四位、十八年度は①一位、二十年度は①七位、二十三年度は①六位、二十五年度は①三位と、徐々にランクを上げてきていることが分かる。

中国と韓国は、平成十二年度、十四年度のころは一位と二位を争っていたものの、中国は十六年度に四位に落ち、以降は徐々に落ち始め、二十五年度はついに十位以下に落ちた。

台湾からの教育旅行も大幅増

日本からの台湾修学旅行が増える一方、台湾からの教育旅行で来日するケースも大幅に増えている。

もともと台湾からの教育旅行者数は少なくなく、平成二十年度は韓国の八千九百十人（百六十九校）に次ぐ七千三百二十人（百六十三校）だった台湾は、二十三年度は三千四百九十四人（百一校）で韓国の三千四百七十五人（百三十八校）を抜いてトップに立ち、二十五年度は一万一千三百八十二人（三百十校）と激増、二位韓国の五千五百六十七人（百九十三校）をWスコアで引き離す結果となっている。

本誌ではこれまで、姉妹都市など日台間で結ばれる提携についてできるだ

け伝えるように心がけてきたが、東日本震災以降、その数も分野も大幅に増えている。例えば姉妹都市提携は、一九七九年から二〇一四年までの三十二年間に三十六件あり、二〇一二年以降の三年間で結ばれたのが半数の十八件にも及んでいる。

鉄道提携に至っては、一九八六年一月の大井川鐵道と阿里山森林鐵道の姉妹鐵道提携に始まり、今年三月の西武鐵道と台湾鐵路管理局との姉妹鐵道協定に至るまでの全十二件のうち、二〇一三年以降に結ばれたのはなんと十一件にも及ぶ。

その他にも、湖や山、神社と廟、温泉、動物園、博物館、大学間の學術提携など様々な提携関係が日台間では結ばれている。面白いところでは、広島県教育委員会と桃園県教育局の教育協定、秋田県スキー連盟と台湾スキー協會の友好協定、瀬戸内しまなみ海道と日月潭じつげつたん自転車道の姉妹自転車道提携などもある。

東日本震災で現れた台湾の真心

では、日本から台湾への修学旅行などの大幅増加や姉妹関係締結の急増の原因はなんだろう。

やはり第一には、東日本震災における台湾からの多大な支援が大きい。修学旅行で訪台して感謝の気持ちを伝えようとするなど、これに応えようとする日本人が少なくなかった。また、日台漁業協定の締結を政治主導で解決したことに象徴されるが、安倍政権になって政治が安定してきたことも見過ごせない。さらに、日台が五十年の歴史を共有していた関係にあり、人的交流が続いていたことも大きい。

中国から一方的に歴史問題や尖閣問題などを突き付けられる日中間係、竹島問題や慰安婦問題などを抱える日韓関係の現状をみれば、台湾の親日ぶりとは真逆だ。それが二百八十三万人という来日旅行者数に現れている。日台間に残る課題が明確に見えてきた。